

新涼書を讀む

菊池三溪

秋動く梧桐葉落るの初

新涼早く已に郊墟に到る

半簾の斜月水よりも清く

絡緯声中夜書を讀む

【作者】菊池三溪(一八一九〜一八九一年)(文政二年〜明治二十四年)、幕末・明治の儒者、名は純(じゆん)、字は子顛(しけん)、通称純太郎、三

溪は号。紀伊(和歌山県)の人、紀州藩に仕え、江戸赤坂邸の明倫館教授となる。後將軍家茂(いえもち)の侍講となり、晩年京都に住む。詩文に巧みにして戯文(ぎぶん)に名あり。明治二十四年十月、七十三才で没す。著書に国史略(こくしりやく)三編、近事紀略(きんじきりやく)、本朝虞書新誌(ほんちようぐしよしんし)、晴雪桜詩鈔(せいせつろうししやう)、三溪文鈔(ぶんしやう)等がある。

【語釈】*郊 墟:郊外の野。 *半 簾:半分おろした簾すだれ) *絡 緯:くつわむし。 はたおりむし。 こおろぎ。

【通釈】秋の気配はすでに青桐の葉が落ち始める時感じられ、新涼の候はすでに郊外の野に忍びよっている。まさに灯火親しむの候、静かなたたずまいの中に鳴く虫の音を聞きながら書を読むことは最高の楽しみである。